

旅泊のすさみ・海中日記

長野栄俊 校訂

凡例

一 「旅泊のすさみ」は、福井藩が建造した洋式帆船「一番丸」の初航海時の航海記であり、安政六年四月十八日～六月十日（一八五九年五月二〇日～七月九日）の内容を持つ。一方の「海中日記」は、同藩が長崎で購入した洋式汽船「黒竜丸」を受取りに行った際の一乗組員の航海記であり、文久三年四月三日～五月九日（一八六三年五月二〇日～六月二四日）の内容を持つ（復路は黒竜丸の航海記）。

一 「旅泊のすさみ」の翻刻にあたり、松平文庫（福井県文書館保管）の「旅泊のすさみ」（A0143-02516 略号〈旅〉）を底本とし、対校に同文庫「諸雑記」（A0143-02512 略号〈諸〉）所載文を用いた。また「海中日記」については、越前史料（国文学研究資料館蔵）の「海中日記」（X0145-01134 略号〈越〉）を底本とし、対校に石橋重吉著『若越新文化史』（咬葉文庫、一九三八年）所載の翻刻文（略号〈若〉）を用いた。

一 校訂箇所にはアラビア数字を付し、末尾にその内容を記した。ただし、文意の解釈に影響しない程度の用字の異同や濁点の有無等については取りあげなかった。

一 文字は一部の固有名詞等を除いて通用のものに改め、判読不能の文字は■をもって示した。また、適宜読点・並列点を加えている。

一 校訂者の注記は、（ ）で傍記した。

一 解題は、本誌収載の拙稿「幕末福井藩の洋式船と航海記」を参照されたい。

一、旅泊のすさみ

（表紙）
「旅泊のすさみ」

安政六己未年兼類加藤藤左衛門・野村与三兵衛・内田閑平の三人、壹番丸御船出帆ニ付、乗組候様の公命を蒙り、四月十八日朝四ツ時福井表出立、明里御蔵前舳船ニ乗り、右三人其外長谷部甚平・佐々木権六・勝山藤五郎杯同船ニ而下りけるに、同夕八ツ時三国ニ着、夫舳御船に移り乗り止宿したり¹

同十九日此日山王御祭礼ニ付、船中安全祈願之為参拜致、公舳金百疋奉納有之、扱同夕清風亭におゐて右三人且水夫共江も御酒被下、夜更るまで互ニ酌かわし、舞つ歌つ何れも佳興ニ入る、九ツ時一統船中へ帰る同廿一日朝の内空曇り、殊ニ風もなかりしか、九ツ時比俄ニ空晴レ北風吹出したり、依之俄ニ艤して道船三四艘にて諸貨物積込セ、手船四艘にて沖中まで乗出したりしか、左右の磯辺にハ心易き限り皆出つ、佐々木・勝山²の兩人も彼小船に乗り沖中まで来り、たかひにしかく³の別れを告げ、南北に袂を分ちぬ、夫舳風はよし、白帆皆たて中走りに馳たりしか、船ハよく馳、八ツ時半時亀島沖、七ツ時越前岬、暮時頃敦賀口の沖に来る、此日三国を出しは八時なりしか、二時斗に二拾里斗馳たり、夫舳同夜風同し、船ハ西を走たりしか、風を友のかたより少し横に受たりしか、猶よく進ミたりしか、夜半比ニハ少し和波たりしか、明方ころ丹後経ヶ崎沖江来る、昨日三国を出しより大率風を横舳友の方江受て走りしか、四帆皆働で船七八度傾きながらよく走りたり、三国より此処ま

て四十五里也しとかや

同廿三日朝の内風子丑の方江廻り、殊ニ力薄くして船進まず、行ともなく退くともなく、同じ処江漂ふとおほへたり、昼時ころ五六里も進ミたりけん、経ヶ崎を友の方に見たりしか、此辺沖遠ふく馳たるにや、総て地方見へす、九ツ時比風又吹出し、船走も鋭く進ミ、暮時比にハ三十里斗も来るへしとおほゆれと、四方地方見へされハ慥ならず、同夜四ツ時比風又々吹募り⁵、動揺強くなりしかハ、フラム帆を絞り、フリツキ帆七合斗り巻で馳せたりしか、明方比出雲国出尾崎^(地藏崎)に來り、経ヶ崎より此処まですへて地方見へす、此処沖の処に隱岐の国とも霞たち定かならず、三国分是まで里数^(ママ)

同廿四日風昨夜より吹直し、四時十里斗走り、此処にて始て隱岐の国を取梶の方に見初めたり、九ツ時ころ風次第に寅卯の方に廻り、殊に厳しくして波高くなりしかハ、又々フラム帆を下げ、フリツキ帆五合斗巻で馳りたり、八ツ時比石州湯の津沖^(温泉津)に來る、此処地方に銀峯といふ山有り、峯数拾侍立、其外一口山処々に有りて、その風景いわぬかたなし、夫よりも風はますます吹募り、波は山の如く高さ一丈余もありと見へしか、船はますます動揺し、傾く事三十度斗、一度八天に昇り、一度ハ地に落ちるかと思へしか、七ツ時比同国浜田沖に來る、此日空ハ晴れたり、風も左までの事はあるまじきなといふ水夫もあれと、余りに波は高し、今度ハ初而の渡海なれハ、今一日も見合せても然るへしとて、俄に船を間切、浜田湊の沖江向しに、波二三枝も高くして船傾く事三拾五度斗、フリツキ帆下し方ハ水にひたし、波時々槽上ニ打揚たり、扱又水溜桶ひかへ繩きれ、処を転して將面の屋根を打碎き、又火焚処の竈杯覆し、

釜杯打摧キたりしか、七半時比辛ふして浜田湊内に入て碇泊しぬ、此処ハ松平右近將監様御城下ニして家数三千斗有り、湊内北の方に瀬戸島^(瀬戸ヶ島)といふあり、此処問屋数軒ありて都而買船商塩なり、又申の方に天神間といふあり、周囲十町斗、此島に天神を安置す、若シ諸船不斗行懸り磯に障る時は必ず風雨出るよし、船四五十艘を入るへし、瀬戸島を上り間といふ、天神を下り間といふ、さて四方の山々皆ひらひて麦を植たり、諸処遊歴せしに田と覚しき地処なし、米は多分他所より買求るよし、千鳥賊・鉄・芋などを産す、就中芋ハ市木・市山杯とて買船杯ニハ最上のものとす、此日陸上ニハ夷船渡來とも覚しにや、なんとなく物さわかしく東西に走り合たる様なり

同廿五日この日天気よく風なし、此地いまた夷製の船は見馴さる様故にや、貴賤上下の別なく皆小船に乗りて見物す、船下終日式拾艘斗も絶間なく行違ひたり、其内士分と覚しきものあまた有り

同廿六日朝の内少し北風吹出ししかハ、纜を解て出帆せしかハ、須臾にして和波たり、扱同夕七ツ時比に漸く浜田より七里斗高島といふ処に來りぬ、此辺ハ石長の国境にして周囲三拾丁斗、民家九軒斗、田畠もありし、此辺かゝるへき間なく、そのうへ風また下り風になりたり、止む事なく船を返して浜へ帰んとせしか、同夜あらしなく、唯潮に伴れて下りけり、浜田沖より拾丁斗下の方へ下り、湊内に入事を得ず、止事なく又船を返して止りぬ

同廿七日北風少し吹出るま、馳たりしか、九ツ時比彼高島の辺に來りつ、夫より風吹募り、船足はやく、七ツ時比長州素佐といふ湊の口に來りぬ、此処磯の方に高野山^(高山)といふ山あり、或ハ黄帝山ともいふよし、此山高さ

式拾丁ばかりにして、上二黄帝の社あり、俗に伝ふ、この神、上古唐土より渡来せしよし、航海のもの別て尊敬甚しとぞ、此山遠くより顕れ、よき目当山なり、時に風なく、空曇り、雨降出しやむことなく、湊内に向ひたりしか、風なくして船進まず、ゆゑに天満卸し引たりしか、漸にして六半時比湊内に引入たり、此湊処々の出島ありて口狭く内広し、湊の内子ノ方に二軒屋・平島といふ村あり、ともに上り間なり、又午の方(蛭湯)に待て方といふ村あり、此前下り間なり、此処は萩の領分にして其家臣(益田越中カ)増田備中といふ士の持分なり、高壺万三千石、市中に屋敷あり、民家千軒斗有といふ、鉄・干鳥賊杯を産するよし、此処より萩江陸道九里、周防江弐拾五里なり、同夜着船するや否や、船玉の勇といふ事あり、そハ船中艫艫の方に別ちなく鈴虫の鳴か如き声するなり、或は天満にて陸江行はともにも来りて勇玉ふ事もあり、俗にいふ、この湊ハ黄帝の社に近き故、別して甚しとぞ、船中の水夫とも、こハ船の吉祥なりとぞ皆々悦ひ合たり、此事尤不審敷事ながら、まのあたり鳴し事なれハしるしぬ、或水夫の少し理¹⁰をしるもの有しか、こハ山間の湊ハ別而度々有事なり、依而勘れハ虫様の類移り来り鳴にてもあるへしとい、し、依て時々こゝろを付て探るに遂にその形を見ざりし

同廿八日此日風なく同処に碇泊し居たりし、水主とも徒然のあまり手繰てふ網をおろしたりしに、鯛・鰈・仮家類^(マゴ)杯許多得たり、依て取敢す庖丁したりしに味悪く我国の類ならず

同廿九日朝の内北あらし吹出るま、出帆したりしに、島より少し沖は和波たり、依て引舟雇ひ、水夫とも頻に引たれとも、波高く、風逆て出かたく、島の内に仮に碇泊の風を待ち居たりしに、四ツ半時比又々風吹出

したりしかハ、帆を巻たりしに、又島間になり、風和波、船は潮に連されて取梶と磯によらんとせしま、又やむ事なく船を返して再び湊内に至りて碇泊したりけり

五月朔日終日雨降り、同処に碇泊す

同二日雨昨夜より降続き、夜半比殊に甚しく、今朝少々絶間有り、五ツ時比西風強く吹出たり、波高く揺動強くなりし故、再び平島の前へ入て碇泊したり

同三日西風吹、終日雨降事強く、同処江碇泊

同四日風初雨降、昼時比快晴二成たり、雲行風とも少し北の方江廻りたり、同処に碇泊

同五日昨日雲晴たり、風吹出しなハ夜半にても出帆すへしと待居たりしが、終夜風なく、今朝天気よし、風いまた出されとも、買船の天満三四艘も頼みて湊外まで引出したり、此日九ツ時より北風少し吹出し、船も進みたり、此処沖に三島(見島)といふあり、経壺里斗、長州侯の城下にして民家も多く有り、豆を多く産するよし、素佐よりも萩(仙崎)よりもとにも十八里の渡りなり、同萩の沖に来りたり、此処素佐より七里なり、扱萩より素佐の間に越前島といふ有り、俗に萩公ハ我公へむかし進め給ひしなど云伝ふよし、いかゝの故にやその故をしらす、同夜嵐少し斗吹出す、夜の明る比おるに千崎といふ沖に来りたり、素佐より萩江七里、萩より此処まで七里なりとぞ

同六日朝五ツ時比未申の風吹出たり、針の方位は西より進むに甚かたく、沖遠く間切レ居たりしか、七ツ時比漸く半里斗上りたり、夫より風午の方江廻りたりしかハ、風を取梶の方江受て走りたりしか、暮時比糠床(ぬかどか)と

いふ崎に來りたり、同夜類に角島さして走りたりしか、四ツ時比和波、船進まず、其上波高くして船動揺甚し、唯潮にゆられて面楳とも取楳とも同処に漂ひ居たりしか、須臾にして風吹出す、船進ミ鋭く、中の方江走りたり、角島を廻る比おひ風ますく、暮り、船は唯矢を射る如くなり、波ハますく¹⁴高くなり、船中いよく手に汗を握りつばかりなりしか、去迎元の湊へ戻らんも叶ひかたく、更ハ九州の地方江より、便宜の湊江入津すへしとて猶船を進めたり、夫より風は猶瀬戸の方江廻り、殊に甚しくて波はいよく高く、船は三十度斗傾き、時々槽上に波上りたり、扱夜明る比は角島を遙に見、二生島^(蓋井島)を取楳に当て、九州筑前の沖に來りたり、千崎より式拾五里斗も来るへしと覺ゆ

同七日朝昨夜より風益吹募り、殊に地方の方江次第に廻りたれハ、船は漸に沖の方に流れたり、筑前の地方は遙南の方に見つ、今更湊江入津せんも叶ひ難く、詮方なくいさ、らハ再び船を廻して千崎へ入るへしとて、又角島の方へ船を向ひたり、時に波高さ壹丈三尺斗、風は強¹²く、帆漸く三合斗巻き、表三角杯皆卸し、水溜桶・火焚処杯は皆繩もて堅く結び留たり、波は槽上に時々打揚、雨ハ車軸の如く降りそ、きて、水夫とも眼も開き得ず、殊に四方雲満て地方も見へず、唯羅鍼耳を守りて進ミたり、夫より九ツ時比漸く角島を跡に見つ、糠床近く來りたり、此処より山陰になりて、波は低¹²くなりたり、故に船は一入¹⁵よく進ミたり、唯空を飛か如く地方に添ひ下りたり、時に雲はいよく深く立満て、目当の山も見へ難く、去れと何にもして千崎へ入津すへしと進ミたりしか、今朝よりの行程を考れば、彼の千崎も跡に成しやなといふ水夫も有りけり、更れハ越ヶ浜へ入へしと議したりしか、須臾にして雲少し晴れたり、よく見

れハ千崎より少し上の方にて、湊の口をもちといちしるく見へたり、船中力を得て働きたりしか、九ツ半時ころ辛ふして千崎の湊に入て碇泊したり、こハ萩より七里斗上の方にして相応の湊なり、同萩公の領下にして民家三百斗有り、此辺漁父よく鯨漁に馴れて、年々拾尾斗も得るよし、同七ツ時比よりおひく雲晴れて、暮時比にハ夕月も定かに見る斗なり同八日空晴れ、風少し出たり、此処は北風の節出る¹⁶に便ならず、越ヶ浜江下りて風待すへしとて纜を解たり、扱此処は越ヶ浜江ハ行程七里斗、瀬戸内にして左右至て近く、山間に漁家少々ツ、見へたり、此日何成日にや、漁船皆緋色の旗などを立て遠見いと見事なり、扱通^(連浦)の口は至て狭く、湊内はよし、夫より此処を出て越ヶ浜へ向ひたり、此間海上に島いくつと数しらす、其内萩の大島といふ島あり、萩より海上二里斗有り、民家もおおく見る、田島とふも開け、又船の間掛りも有るよし、其外科人島といふ有り、此処萩より罪人を流し置よし、通ひより外ヶ浜江^(越カ)行にハ萩城を面楳に見、取楳に彼大島・科人島杯有り、扱磯の方、城より少し上の方に砲台も有り、砲門式ツ見へたり、萩城ハ山城にして周圍三拾丁斗り、本丸ハ絶頂にして山下寅の方追手なり、又市中民家数限りなく見ゆ、扱磯辺にハ見物の貴賤数しらす見へたり、又士分と覺しきもの三四人ハッターラに乗りたり、扱右ハッターラ、外面漆塗にて内は白フルニスにて塗たり、中帯は朱塗にして見事なり、水夫共四五人打かひとふの調練よく揃ひたり、夫より越ヶ浜に行たりしに、右入口に鷲ヶ鼻^(外浜)といふ岩有り、又申の方に夷と云ふ間掛有り、此処より外ヶ浜江ハ拾五里斗なり、此処造艦場にして役所其外小屋など許多有り、此節ハルツク^(庚申丸)とかいふ軍艦に取懸り居たり、其高低拾度なり、その船工何某に尋しに、

大艦にてハ平度適度のよし、されと艦小なるに応して其度を減するよし語りし、同夕八ツ時ころ入津したり、同日家士の内、山田亦介・藤田作左衛門・松島剛蔵・楊井謙蔵¹⁷杯其外士夥敷来り面会したり、扱湊之内民家式百軒斗、遊女も有るよし、されと三味線などハ嚴敷国禁のよし、又拾年以前より殊の外節儉の政事のよしにて市中の男女はいふニ及す、士分たりといへとも木綿常用のよし土人物語なり、此越ヶ浜といふハ萩より沓里斗丑寅に当り、上下の湊有りて民家を挟たり、此辺都而水払底のよしにて、諸船はいふに及はす、家々も皆水を遙かの吉川より汲来るなり、依てまた嫁なきの湊とも字せしよし、又湊の酉の方に山あり、官より猿を夥敷飼置よし、扱長州侯の領分ハ長周共不残海岸にして防禦の地百里有りとそ、依之軍艦ならてハ防禦の力不及とそ、此節専ら軍艦製造等に力を用る杯一有志人物語りなり

長州産物

苧・蠟・石炭・鯨魚・半切紙・紅花・鍔・ポットロード²²・干鳥賊

同九日天気好し、風なし、同処に碇泊し居たり

同十日同断

同十一日萩の士松岡剛蔵¹⁸方江被招、辞するに言なく、招に任せるとそ、加藤藤左衛門・内田閑平兩人同道にて行たりしか、赤川直次郎¹⁹・久坂玄瑞²⁰・小田村伊之助²¹・秋良敦之助²²・藤井正之助会合す

同十二日朝の内少し北風吹出したり、依之四ツ半時俄ニ出帆したりしに、九ツ時萩城の沖にて又風吹変りたり、依てやむ事を得ず舟を返して鷺ヶ鼻の内に碇泊したりしか、同夕八ツ時又北風吹出したりしかハ又纜を解て出帆したり、去れと兎角風弱くして船は微々として進ミたり、暮

時比彼通の口に来り、同夜あらし少くしていよく船は進まさりし、今宵水夫共試ミに釣を垂しに大鱈三四十尾・鳥賊六十疋を得たり、扱夜半比より少し嵐出つ、明る比千崎沖に来りし

同十三日朝未の風吹出したり、上るに逆ひなり、依之沖遠く開き、昼時比酉戌の方江八里斗進ミたりしか、九ツ半時比風次第に戌亥の方江廻りたりしかハ、引返して未申の方江船を返したり、八ツ半時よりハ汐も上りなり、故に船よく進ミ、暮時比二ハ角島を過たり、此処ハ北海無双の難処にて平島遠く沖江出つ、殊に磯際ニハ処々大岩有りて折々船を砕くとそ、上米角島三里乗へからす杯証文に書よし、尋常の節ハ島の上、人か馬かを見分る斗の処を程として通るよし、初而渡海の水夫ハ角島前とて色々有合の物ニ而鐘・挟物杯之形を拵へ、同船の者を己か家来として、扱幾へんとなく船をねり歩き、颯に至る度毎ニ角島の方を遥拝して廻るよし、又その祝ひとて同船の者江酒杯振舞候よし、余三人も初而之渡海なれハとて船中しきりに進めたりしかと、余り拙き事にて笑ふのミにて過たりけり、扱夫より風また亥の方江廻り、汐ハ上る事甚急にして船進ミよし、須臾にして角島を弑里斗跡に見たり、夜半比風また弱りたり、汐は下りニなりぬ、唯流れを幸にして進ミ居たり、夫より七ツ時より風未申に變りたり、進に甚難く、いろく間に間切居たりしか、明方比同国観音崎といふ処江来りたり、此処取梶に観音崎、面梶に二生島といふ有り、相對して其間弑里斗なり、千崎より糠床まで七里、糠床より角島まで七里、角島より二生²⁵まで同七里、合て弑拾里なり

同十四日朝風卯辰にして潮上りニ成りたり、船走りよく、須臾にして二三里進ミたり、此日風は横受なり、我船には究竟の風なれハ、諸の船

皆乗越つ、四ツ時低島(彦島)に來りたり、扱此処いろく歴観26したき処あれとも、昨夜より雨降事甚し、依てこゝろならず將面に潜居たり、扱昼時前小福良といふ処に來り、此時潮ハ上らす、船は針斗變りて風に逆ひたり、依之止事なく此処二碇を卸したり、此処東に小福良といふ湊有り、又南の方ニ豊前小倉の城下有り、丑寅の方はもつれ、二生25・低島などの諸島数々見へたり、此辺都而瀬戸内にも尤狭くして、本山よりこなたハ潮上下殊ニ甚敷、中々我福城の九頭龍川の類ならず、角島分此辺まで十三里、又下の関江ハ式里斗なりとぞ、此日雨降る事終日絶間なく、夜中も又しかり

同十五日朝の内雨降り、風なし、四ツ時潮上りニなり、風も少し出つ、依て出帆したり、時に汐行段々甚急にして、其上天満おろして引たれハ進事はやく、須臾にして彼の与兵衛(写次兵衛ケ瀬)カ瀬といふ処に來りたり、13此処取梶の方に鳴瀬といふ大岩あり、干潮に顕れ、満潮に没す、夫より少し上方にかの与兵衛有り、こハ海の中通りにして、上は満干ともに顕れ、至而少しといへとも、27下ハ数十間に渡りて広ふしといへり、上にさゝやかなる立石有りて遠よりも見やすからしむ、両岸は一段狭く、汐はかの瀬に当て流る、事一様ならず、28実に無双の難処なり、昔或諸侯の船、この処江行か、り、その表役表役は船の颯に立て運動を司る役なり与兵衛といへるもの、誤て彼の瀬に乗て船を打碎きたりしか、直に入りて失ひしとなん、依てかく名つけしよし、扱この処江懸りし比、売船壹艘先達而進ミたりしか、我船、彼の与兵衛より北の方より入るへきを、汐に伴れ、瀬より南の方江流れ、不斗彼船と進ミよりたりしか、彼便なくや有りけん、引返して船を下の方江向たりしか、いよく我船と行向ひ、互にひらけくと声懸りて進

ミたりしか、汐ははやし、双方梶も心のま29ならず、あわや一大事にも及ふへく覚しか、漸く壹尺斗ひらきて、互にさゝ、わる事なく辛ふして行過ぬ、余等ハ聞しにまさる難処なれハ、櫓上二手に汗を握り居しか、風程よく下りて難なく九ツ半時比下の関江入津したり、扱此処は西海・北海に名高き大湊にして、常に出入の船、黄葉の風に行か如し、碇泊又五六間斗の絶間もなく、遊女其外酒・肴・蕎麦・菓子32の類までも売歩き、その声夜中までも絶間なく、其繁昌なる事中々筆紙に述難し、下の関むかしハ赤間関とも云しよし、少し下の方に岸柳島(巖流島)といふ有り、彼佐々木・宮本の支合せし処といふ、扱夫より少し磯の方に小瀬戸といふ有り、口至て狭し、されと北国下りの小船は時々風模様により下るよし、又市中の上の方に檀の浦といふ有り、昔、安徳帝御入水の跡とぞ、此処に阿弥陀寺といふ寺有り、安徳帝及諸平氏の御願有りとぞ、又豊前小倉は関より少し下の方にして市井海辺に臨めり、扱夫より上の方に内裡(天里)といふ有り、又茂浪(マタ)といふ村有り、此処より夥しく塩を出すよし、塩竈の煙常に絶間なし、又壹里斗上の方に芽刈(和布刈崎)ケ崎といふ有り、長州檀の浦と相對して、其間至て狭し、俗に伝ふ、正月元旦潮干甚し敷三丁斗の潮干と成り、此処にて土人例として三把ツ、芽を刈て神に奉るよし、依て芽刈ケ崎といふ、其社を芽刈権現といふとぞ、此日夕方雨少しやミけり

同十七日同断

同十八日同断

同十九日同断

同廿日朝晴し、風も吹出たり、依而五ツ時前出帆したり、扱関より壹里斗にして彼の芽刈崎といふ、此処兩岸相對して至て狭し、潮行早し、夫

より又少し上の方に金伏といふ瀬有り、常に水投して見へ難く、通行に馴れたりし船にても引船雇ひて出入するよし、又夫より式里斗にして、干珠・満珠杯いふ鳥有り、ともに取梶に見るなり、此日風よく吹出し、横に受て馳せたりしか、諸船皆乗越たり、四ツ時比七里斗本山いふ処に來り、八ツ時岬に來る、時に風和波、船進まず、一時斗漂ひ居たりしが、七ツ時比又少し風吹出たり、暮時豊後姫島といふ処に來る、同夜雨頻に降し、宵の内は和波たりしか、夜半過比申酉の風出つ、船は真友なり、彼伊王島(祝島)・上関杯を越へ、明方比伊予国青島といふ処に來りたり、下の関ヶ原周防上の関まで三十五里、此間を周防洋といふ、扱周防の内三田尻といふ有り、塩を焼て夥敷他国江出す、こハ萩侯の領下にして関より拾壹里なり、扱明方の潮も下り二なりたれハ、こゝに碇泊して上り潮を待居たり、関より此処まで道程五十六里なり

同廿一日朝降事強く篠を乱すか如く、されと潮盛に上りたりしかハ出帆したり、四ツ時馬島に來る、青島より此処まで拾里、俗にいふ、此島厚居るよし、其種を取とて領主より雌馬数正放ちおくよし、風ハ朝より追手風なりしかハ船はよく馳せたり³⁶か、昼時又和波たり、同夕八ツ時までハ徐々に進ミたりしか、又亥子ノ風吹出たり、齋宮(齋島)といふ鳥より安芸の御手洗(天崎下島)といふ湊までハ飛か如くに馳せたり、此辺左右とも山近く、殊ニ岩石・松樹杯我旅情を慰るに似ていと面白し、扱右御手洗ハ広島侯領分にして、至て繁昌の処にて諸方交易盛のよし、民家も奇麗にして遠見いと見事也、此島地方より五里斗隔り、周囲三里斗り、年々麦千石斗を産といふ、扱夫ハ須臾の間船よく馳せたりしか、七ツ時過比又和波たり、凡て瀬戸の内風吹事一様ならず、一時二時にして替る事常なり、磯に真

友にて馳る船あれハ、沖に逆風の向ひ間切も有り、上波高く風走の如きも有り、時を移さず和波るも有り、さて夫ハ忠(忠海)の海に來りし比ハ夕陽既に波に没し、殊に汐も下り二なりたり、依而此処に碇をおろしたり、同夜九ツ時汐また上りたりしかハ出帆したり、此夜嵐なく唯少しツ、進ミたりしか、夜の明る比備後国当木(当木島)といふ処江來りたり、青島ハ此処まで式拾式里、関より七十八里なり、時に汐また下りになり、碇を卸したり同廿二日朝の内汐下り、殊ニ風なく扱なく碇泊し居たり、此処四国の方に百貫といふ鳥有り、磯辺ハ底浅く処々岩有るよし、一兩日以前九州辺の船壹艘夜中乗掛り船覆りたるよしにて碎たり、磯辺にハ貨物等多く積置たり、見る二いと哀れなりしよふなり、扱四ツ時汐上り二成たれハ出帆しつ上りたり、此辺取梶の方に鞆(鞆の浦)・又尾の道(尾道)など云ふ湊も見ゆ、又あぶとの観音といふ有り、何れも備後の地にて名高き処なり、昼時風出つ、帆よく馳せたり、扱此辺汐行一様ならず、先満汐の時ハ嵯峨(佐賀関)の関より入汐三ツに分れ、壹ツハ周防の地方に向ひて満行し、又壹ツハ下りて下の関江向ひ、備後白石といふ島の辺にて大坂ハ入來る汐と相合し、又分れて上下する也、故に大坂より右白石までの汐は下の関辺と同時に上下す、白石より嵯峨までの汐は相反して上下する也、此日下より満汐に乗て上りしか、此辺にて又上方の引汐に移りたれハ、朝より能く上りたりしか、夕八ツ時過又風出たり、時に取梶の方に小島有り、青島といふ、民家多く、麦千石斗年々産するよし、夫より船は一時二早く進ミ暮時ハ(ママ)コ島に來り、同夜四ツ時ころ讚州多唐津江入津したり、ハ(ママ)コ島ハ伊予・讚岐の国境にして、夫ハ多唐津ハ式里斗なり、扱此湊ハ京極(高塚)壱岐守殿の城下にして領地壱万石、市中も相應の処なり、湊の内波戸数

百間築出し、内周圍至而広し、波戸三ツ有り、其切れたる処則諸船出入之節の口なり、塘長サ八十間斗り、上の幅四間斗、水上の高さ壹丈五尺斗、下の幅これに准す、扱塘の上に高灯台二ツを設け夜中出入之便とす、此処より象頭山江道程三里有り、参詣の船夥し、市中真田帯・砂糖を産す、当木より箱(箱崎)の岬十五里、此処より多渡津江二里なり(多度津)

同廿三日天気よし、朝の内風悪しく、汐下り二付碇泊す、此内野村氏及び水夫とも五六人象頭山江参詣し、船中安全の神札杯受得て返れり、扱此神札受様ニ習有事にて、その持出し候ものを神札二而、頭二もせよ、手足二もせよ、うちた、けハ、いよ、神の守護強しとて受取者ハ初よりその手配りをく、又渡す坊主ハた、かれましとて此方江渡すやいなや、その下の方を打返し逸早く逃行よし、参詣せし水夫物語したり、扱夕七ツ時汐上りたれハ出帆したり、されと風あらく進ミ得ず、あちこち間切居たり、同夜風いよ、募りたれハ、多渡津ヶ壱里斗三味島といふ処に碇泊す、こハ讚岐の内丸亀の沖なり、此は京極佐渡守殿城下にして民家も多く、城は山城にして見事也、扱此夜風吹募り、八ツ時碇加賀緒の結ひ解ケ、風に随而流れたり、水夫共、すは大事よと周章騒けと、くらさハ暗らし、殊ニ船は駿馬の如く流れたれハ、繩の根を取るにも手段なく、た、あれよと云ふ斗二而、船は終に碇繩をはなれ、遙に沖江流れたり、依之取敢す又壱頭をおろしたり

同廿四日朝昨夜放ちし碇取らはやとハツテ一ラ船なと卸シ、日暮迄いろく、尋求れとも、昨夜碇泊せし跡も定かならず、殊ニ汐は早く、風は疾し、探るに便なくして遂に得ず、依てけふも同処に碇泊したり¹¹

同廿五日三味島江人遣し、漁夫とも六人小船式艘雇ひて探らせしか、よ

くその業に馴れたる様にて、須臾にして探り当たり、上下皆々勇ミ合ツ、彼漁夫等ニ物取らせて返し候、去れともけふも風悪しく、雨は車軸を流すか如く降出したり

同廿六日朝の内風なく汐は下り也、故に見合居たりしか、夕七ツ時比潮上り二相成、風も出しかハ、すはやとて出帆をそなしける、扱日の暮る、比までハ少し風も有しか、夫よりハ和波、唯汐に伴れて少しツ、進ミたりしに、明方比二ハ三里斗上りて同国高松の城沖少しこなたまで来りたり、此処下の方壱里斗二土島と云ふ有り、至て小島なれとも其形然としてよき見当山なり、或ハ又乳島といふよし、こハ形の如く似たれハ水夫ともものかりに呼事なりとて、時に風なく汐下りたれハ、こ、に碇泊したり

同二十七日朝四ツ時比汐上りたれハ纜を解たり、夫より少し上の方ニ(男木島)雄木島といふ有り、周圍式里斗、民家も多く、畠杯多く開たり、高松の城ハ平城にして海浜ニ臨めり、扱又此地方二八島、檀(檀ノ浦)の浦杯八源平古戰場にして、八島ハ下急ニして上平なり、俗に頂を千疊敷といふ、矢振ハ(八栗カ)峨々たる高山にして何れも遠見合いちじるし、三尾ノ矢・景清相別、又ハ源氏七騎にうちなされ陣取たる杯皆追のよし、次信打死の処ハいづ方とや尋しかと水夫共ハ知し者なし、又夫今少し上方沖に太鼓崎といふ(太鼓鼻カ)有り、右源平戦争之時、本陣を据て太鼓を打し処なりとぞ、夫より風和波なり、同夜明方比迄漸く五里斗り地蔵崎といふ沖江来りて碇泊したり

同二十八日朝の内碇泊し居たりしか、九ツ時汐上り、風卯寅吹出したり、依而此処出帆したり、時に汐ハ上り盛んなれと風逆ひて船進まず、左右這へ間切居たり、八時比風益吹募り、波も高く進に甚難し、去れと

今更戻んも口惜しとて、猶間切居たりしか、七ツ時過五里斗進んで鳴戸の口に来りたり、けふハ風鳴渡物にて鳴渡口より吹来り、又吹方は上下へ渡候よし、其故にや、風次第廻りて船よく進ミたり、此処南に鳴戸口、尚夫より西ノ方ハ阿波国、東の方ハ遥向ふニ淡路島有り、南北に亘りて其周囲甚大なり、北ハ播磨^(播磨)地方ニ而、彼室の津、高砂松など有るよしなれとも、隔り甚しけれハ見江難し、又丈島^(上島カ)とふの諸島有り、扱地蔵崎ハ淡路地方迄海上拾九里の渡りなり、則播洋といふ此なり、凡而瀬戸内かゝる開けたる洋ハ周防洋、此播洋斗なり、同夜風少し吹たるみたり、去れと風筋よけれハ能く進ミ、暁八ツ時比淡路島西の方ニ来りたり、時々汝行悪敷風も少し替りたれハ此処⁴⁷に碇泊す

同廿九日朝四ツ時汐漸く上りたり、依而出帆したり、去れと風大坂揚にて強く吹出したり、此処に明石御城下・一ノ谷^(須磨)・須戸浦杯見ゆる、又南ハ淡路島の出崎にして松ヶ崎^(松ヶ崎)といへり、播州舞子之浜と相對して其間至而狭し、故ニ汐の上下甚急にして、汐に逆ひて追風にても進ミ難しといふ、扱須戸の浦ハ播州高砂までの間名処至て多し、須戸に須戸寺といふ有り、彼敦盛か青葉の笛を蔵するよし、又関の跡有りて行平^(在原行平)の松トいふ古木、松風・村雨の海士塩汲ニ跡并し二人の塚有りて此処今に絶ず塩を焼よし、又かねかけの松^(敦盛塚)・敦盛の石塔^(高砂神社)・相生の松^(柿本神社)・其外舞子浜^(人丸社)・人丸社杯有るよしなり、扱播州国境敦盛の石塔ハ一ノ谷と舞子の浜の間也とぞ、扱この日逆風を事ともせず頻に間切て進ミたりしか、昼時比にハ彼松か崎を跡に見たり、扱夫も風ハ強し波ハ高し、進むにいと難りしか、七ツ時比辛ふして和田岬少しこなたに来りたり、此処岬は出張たり、湊に入事叶ひ難く⁴⁹、依而暮時前岬より少し沖のかたに碇泊したり、時に波高

く風強く船動揺甚強く、去れと汐五分ハ何にもして湊内に入へしと議し居たり、扱同夜六ツ時俄ニ南の方鳴動強く、すハ雨風来るへしと船手あらかしめその用意したりしか、暫時して風午の方より吹来り、殊ニ雨ハ車軸の如く降来りたり、眼は雨にうたれて開き得ず、かすみ立満て余尺の間も見へ難し、そのすさまじき事いふ斗なし、されと水夫ともハ他事ハ業ニ馴れ、殊ともせず俄ニ碇を巻き揚ケ、帆少々斗巻んとせしか、風走り馬の如く来れハ、船はそのまゝ、雲を霞と湊を指して馳りたり、扱深く入なハ他船ヲあやまたんも斗り難けれと逆湊口にて碇泊したり、時に余の船も同しく馳りたりしか、闇さハくらし、風強くして船運動心に任せず、他船自船をくつ返さんも斗り難けれハ、互に声を揚つも馳りたり、碇を揚より漸く一分時にして式拾斗も馳り、入津して始而上下安堵したり、松島より此処まで五里なり、凡而湊ハ子丑ハ地方、酉戌の方ハ和田岬に囲ひ、その余寅より辰の方は大坂・紀州地方也、唯午未の方、^(加太)加田瀬戸に向ひ、此方斗ひらきたれハ殊ニ恐るゝ風なりとぞ、扱夫より暫時にして風止ミ雲も晴れたり

六月朔日朝雲も晴れたり、此日大坂江所用の有しかハ、加藤・内田兩人同道ニ而行たり、兵庫湊にて早と云ふ舟に乘たりしに、風追手にして漸く一時斗にして大坂安倍川の口に来りたり、¹³兵庫より此処まで拾式里也、扱此処磯に天保山と云ふ有り、下に高焼を置いて遠見の便とす、川口二両方水尾木と云ふを打たり、沖より段に壱番より拾番まで有り、はその舟の出入の為とぞ、難波江の身を尽しとハ是なり、かくてあちこち用調へて暮時比雑魚場茶屋店に休らひて彼早船の出船を待居たり、扱大坂市中ハ東西南北に橋を渡し、其川幾筋といふ数をしらす、こハむかし大閤^(大閤)都

を開らき給ひし比の製なりとそ、凡而市中繁昌なる事いふ斗なし、去れと皆人の見る処なれハ略して、同夜四ツ時出船するよし案内あれハ乗りて下りたり

同二日朝明すつる比、安倍川の口を出しか、風悪しくやうやく四ツ時比兵庫二下りぬ、扱この湊ハ大坂にも劣らぬ斗の湊にして湊内至て広し、常に出入の舟いくはくといふ数をしらす、その繁昌云ふ斗なし、西の方に和田岬南北に亘り、東は西ノ宮・尼ヶ崎・大坂の地方、夫より又泉州堺・岸和田等也、西ノ方沖にひらひて淡路島有り、その亘り東西狭く南北広し、内海の亘り東西南北各拾三里斗なり、扱北の方ハてつかひか岸、彼鶴鳥越・一ノ谷・生田の森・布引の滝・湊川又广郭山抔有り、兵庫より東の方にかふべ(神戸)といふ湊有り、又清盛公築島有り、今ハ人民建ならべたり、又和田岬に笠掛ヶの松あり、清盛の石塔有り、いづれも名高き名処なり、此日夕少しの閑を得しかハ三人打連て彼楠公(楠木正成)の墓に詣たり、こハ兵庫少し北の方なり、先湊川に至りしに、此節水かれて平地の如し、その両岸松樹多く生茂りたり、この松、楠公戦争の時はいまた五尺斗なりしか、一日甲杯蓋ひて偽兵とせしよし、しかるに物換り星移りて今こ、に百年、松はその芳名と共に朽すして雲を払ふ斗になりぬと、これすら懐旧の情堪かたかりしニ、また行事三四丁斗にして彼楠公の社に來り、こハ昔水戸西山公(徳川光圀)その功を不朽に伝へ給はん為建給ひし由ニ而、社ハわつかに三間四方斗といへとも松柏景々として其辺りを囲ミ、鳴鳥声悲しく人情を引に似たり、扱入事数歩、左右石灯拾本も建置たり、その内諸侯奉納も有り、又遠遊の人奉るも有り、社内ニハ壱ツの石塔有り、高サ八九尺斗にして、表にハ西山公御筆の由ニ而、嗚呼忠臣楠氏墓(之欠カ)と題

し、裏ニハ彼朱舜水の碑文取有り、又夫下に楠公御像有り、大サ壹尺四五寸はかり、御朱帯の御姿なり、その御顔はせ杯59、実に堂々として威有りて猛からず、一度これを拜せハ何人かその袖をぬらさゝるへき、三子互に懐旧の涙と、めあへず、楠公世にいましかりし時、忠潔空しく奸臣に隔られ給し事、又桜井駅御父子御相別の御情はた金剛院ニ而御生害の御事など不斗語合候も踟蹰していと去りかたかりしか、夕陽に春し頃漸にして帰路に趣たり、扱帰路社主の何某の許江問しに、主も流石物にくらからぬ様にて慇懃に御在世の事など物語り、再び感涙を催ふしツ、石碑の石摺杯求め別れを告て出たりしか、猶遅々として松柏の梢見ゆる限り返り見ツ、黄昏のころ船手江帰りぬ

同三日朝未明纜を解たり、此日風なく唯汐に連れて少しツ、進ミたりしか、夕八ツ時比辰巳の風吹出たり、去れハ針筋ハ午也、あち間切ツ、漸く夜四ツ時比六里斗來りて淡路須本の沖に來り碇泊したり、須本ハ阿州侯の家臣稲田九郎兵衛領下にして屋敷も有るよし、島中六万石ありといふ、市中多ハ漁父なりとそ、望遠鏡ニ而詠たれと間隔たれハ定かならず同四日朝の内風なし、殊ニ汐も上りたれハ碇泊し居たり、同夕八ツ時比追風出たりしま、帆巻たり、時に汐ハ下りなり、風は疾く、飛か如く進ミたり、須臾にして加田之瀬戸に來りたり、此処面梶ハ淡路の内由良の湊なり、取梶ハ紀州地にしてたくらか鼻(田倉崎)といふ大坂よりも兵庫よりも下りの時此処の行逢処なり、大坂里、兵庫拾貳里なり、扱夫より下の方ハ吉野川の末の方にて紀の川といふ川有り、又和哥山御城下も三里斗下りなり、夫ハ五里斗馳たりしか、風替りて進ミ難く雨降出つ、依而大崎といふ湊に入りぬ、此処上下よき湊にして民家多く有り、扱入口に

沖(沖ノ島)のへつ、い・地(地ノ島)のへつ、いと二ツの島あり、下りの時は右二島の中を行也、此処今紀三井寺江四里、熊野江九里なりとそ

同五日朝風なし、昼時比より南風強く吹出たり、諸船とも碇を増たり、同夜も同じく吹たり、依而この日も碇泊したり

同六日天気よし、九ツ時より北風吹出たりしかハ纜を解たり、此日波ハ高し風ハうすし、条々として進ミたりしか、暮時比日(日ノ御崎)ノ岬の沖に來りたり、此処北の方に加田之瀬戸、夫々少々西の方に阿波の鳴戸、又夫より西に當りて土佐の東の浦杯見へ、扱又日の岬々壱里半斗の方に日高川の湊、又上の方壱里斗に由良の湊有り、日高ハ川湊にして大船ハ入らざるよし、その川上道成寺といふ寺有り、昔狂女の物語有りしも此処なり

とそ、扱同夜初夜過る比嵐吹出つ、船よく馳りたりしか、夜の明るころおひ大島(紀伊大島)よりこなた五里斗に來りたり、日の岬より此処まで二拾里斗なり

同七日風同じ、去れと力薄くして船進ミ遅く、昼時比漸く大島ニ來りたり、此処周囲甚た広く、上平にして民家田畑等なし、此出崎(雷公神社カ)に明神の社有り、此社洋中ニ而地方杯見へ失ひたる比、此神に祈れハ即時に火見ゆるとて航海の者尊敬するよし、扱九ツ時比より未の風吹出つ、暮時比に二木(二木島)といふ処に來りたり、時に風替り汐あしく無抛この湊江入り、二木の間地方三里斗に熊野の滝見へたり、その丈ケ式丈斗、幅七八尺斗と見ゆる、此滝快晴の時洋中拾里斗見ゆるとそ、扱又その磯(網切島カ)にフタラク島と云ふ有り、此辺古より鯨漁を渡世とするよし、水主なるものに尋しに、先沖ニ來るを見て近浦相告報し、小船数拾艘斗乗出し引網を幾へんとな

く打懸ケ、扱鯨魚波上に浮出るを見て、彼のもりといふ物を打掛け、夫

ハ鯨の行先を考へ、又波上に浮出たるを見て、又々もりを打懸ケる也、そのもりたん／＼数拾本打懸けれハ鯨魚その苦しミに堪へ兼ね、水底に没し得ず、暇なく浮ミ出るよし、扱その弱りたる程を考んかへ、手形切といふ漁人壱兩人鯨魚に飛乗り、暫時鯨魚とともに水中ニ浮沈す、その尾と頭ともりの穴を穿ちし鯨肉を直ニ持参り、その親方に注進するよし、こハ漁夫中最一の高給を取よし、扱亦時として彼もり数拾本打たる後、俄二雨風來りし時ハ地方の山杯見当とし、そのま、捨帰り、数日立て和波たりし比、彼処江行見れハ、鯨魚の沈ミ居る辺ハ油波の上に浮ミ有るよし、夫をしるへに碇をおろし、彼引網に相懸り揚るよし也、扱此湊ハ入口(笹野島)に笹島といふ出島有り、夫々内四方皆高山ニ而打囲ミ、さながら井中ニ居る如し、民家式百軒斗相応の湊なり

同九日未明此処出帆したりしか、昼時比まで風なく、壱里斗三木といふ湊の沖に來りしか、夫々風よく吹出つ、船よく馳り、湊数(行)、九木(九鬼島)すかる、錦袋(方座カ)、本庄(贊)、に糸杯の沖をこえ、七ツ時過浜(浜島)と云ふ湊の沖に來りたり、扱加田瀬戸より此処まで海岸九拾九里の内紀伊公の御領下として湊数九拾湊有るといふ、夫安乘(安乗崎)り沖迄暮時比來りたり、二木より安乘りまで二十六里、扱右浜此辺ハ志州の領下にして鳥羽ハ此処より五里斗子ノ方に當るよし、伊勢太神宮江程近くとそ、同夜風段々沖の方江廻り、船卯走り候処、寅二向ひたりしかハ、船手いか、せんと議したりしに、夜半比風頻ニ吹出つ、雨降出たり、依而プラム三角帆杯おろしたりしか、夫より又西ノ方ニ廻り、真度ニ來りけり、依而船中皆勇合て頻ニ馳たりしか、夫より翌十日朝五ツ時懸(マヤ)といふ処に來り、これまで都而地方見へす、此処ハ遠江地方にして安乘よりハ伊勢・尾張・三河の沖を式拾五

ハ鯨の行先を考へ、又波上に浮出たるを見て、又々もりを打懸ケる也、そのもりたん／＼数拾本打懸けれハ鯨魚その苦しミに堪へ兼ね、水底に没し得ず、暇なく浮ミ出るよし、扱その弱りたる程を考んかへ、手形切といふ漁人壱兩人鯨魚に飛乗り、暫時鯨魚とともに水中ニ浮沈す、その尾と頭ともりの穴を穿ちし鯨肉を直ニ持参り、その親方に注進するよし、こハ漁夫中最一の高給を取よし、扱亦時として彼もり数拾本打たる後、俄二雨風來りし時ハ地方の山杯見当とし、そのま、捨帰り、数日立て和波たりし比、彼処江行見れハ、鯨魚の沈ミ居る辺ハ油波の上に浮ミ有るよし、夫をしるへに碇をおろし、彼引網に相懸り揚るよし也、扱此湊ハ入口(笹野島)に笹島といふ出島有り、夫々内四方皆高山ニ而打囲ミ、さながら井中ニ居る如し、民家式百軒斗相応の湊なり

同九日未明此処出帆したりしか、昼時比まで風なく、壱里斗三木といふ湊の沖に來りしか、夫々風よく吹出つ、船よく馳り、湊数(行)、九木(九鬼島)すかる、錦袋(方座カ)、本庄(贊)、に糸杯の沖をこえ、七ツ時過浜(浜島)と云ふ湊の沖に來りたり、扱加田瀬戸より此処まで海岸九拾九里の内紀伊公の御領下として湊数九拾湊有るといふ、夫安乘(安乗崎)り沖迄暮時比來りたり、二木より安乘りまで二十六里、扱右浜此辺ハ志州の領下にして鳥羽ハ此処より五里斗子ノ方に當るよし、伊勢太神宮江程近くとそ、同夜風段々沖の方江廻り、船卯走り候処、寅二向ひたりしかハ、船手いか、せんと議したりしに、夜半比風頻ニ吹出つ、雨降出たり、依而プラム三角帆杯おろしたりしか、夫より又西ノ方ニ廻り、真度ニ來りけり、依而船中皆勇合て頻ニ馳たりしか、夫より翌十日朝五ツ時懸(マヤ)といふ処に來り、これまで都而地方見へす、此処ハ遠江地方にして安乘よりハ伊勢・尾張・三河の沖を式拾五

ハ鯨の行先を考へ、又波上に浮出たるを見て、又々もりを打懸ケる也、そのもりたん／＼数拾本打懸けれハ鯨魚その苦しミに堪へ兼ね、水底に没し得ず、暇なく浮ミ出るよし、扱その弱りたる程を考んかへ、手形切といふ漁人壱兩人鯨魚に飛乗り、暫時鯨魚とともに水中ニ浮沈す、その尾と頭ともりの穴を穿ちし鯨肉を直ニ持参り、その親方に注進するよし、こハ漁夫中最一の高給を取よし、扱亦時として彼もり数拾本打たる後、俄二雨風來りし時ハ地方の山杯見当とし、そのま、捨帰り、数日立て和波たりし比、彼処江行見れハ、鯨魚の沈ミ居る辺ハ油波の上に浮ミ有るよし、夫をしるへに碇をおろし、彼引網に相懸り揚るよし也、扱此湊ハ入口(笹野島)に笹島といふ出島有り、夫々内四方皆高山ニ而打囲ミ、さながら井中ニ居る如し、民家式百軒斗相応の湊なり

同九日未明此処出帆したりしか、昼時比まで風なく、壱里斗三木といふ湊の沖に來りしか、夫々風よく吹出つ、船よく馳り、湊数(行)、九木(九鬼島)すかる、錦袋(方座カ)、本庄(贊)、に糸杯の沖をこえ、七ツ時過浜(浜島)と云ふ湊の沖に來りたり、扱加田瀬戸より此処まで海岸九拾九里の内紀伊公の御領下として湊数九拾湊有るといふ、夫安乘(安乗崎)り沖迄暮時比來りたり、二木より安乘りまで二十六里、扱右浜此辺ハ志州の領下にして鳥羽ハ此処より五里斗子ノ方に當るよし、伊勢太神宮江程近くとそ、同夜風段々沖の方江廻り、船卯走り候処、寅二向ひたりしかハ、船手いか、せんと議したりしに、夜半比風頻ニ吹出つ、雨降出たり、依而プラム三角帆杯おろしたりしか、夫より又西ノ方ニ廻り、真度ニ來りけり、依而船中皆勇合て頻ニ馳たりしか、夫より翌十日朝五ツ時懸(マヤ)といふ処に來り、これまで都而地方見へす、此処ハ遠江地方にして安乘よりハ伊勢・尾張・三河の沖を式拾五

里半也

同日風は昨夜より吹直し、此日ハ取分吹募り、船はさながら矢を射る如く、昼時比御前崎、八時ハ路島(石廊崎カ)、七時半時比下田沖、暮時比鎌倉沖同夜五ツ時比相州浦賀湊江入りぬ、今朝より行程九拾三里斗、その内風ハ少しも吹たるみなく殊ニ追波なり、その疾事云ふ斗なく、颯の方水煙絶事なく立たり、船足測量せしに百間斗を五十秒ニ而馳りたり、此日ハ船寅卯走りなり、風ハ申酉なり、始終真度ニして馳りたりしか、諸船多く乗越たり、船動揺殊の外甚しくといへとも、その快き事いわん方なく覚へし、扱この日渡来し地方にハ名所数々有り、その内富士山・三保の松原抔見ゆるよしなりしか、終日雲立満て見へかたく事

(改丁)

志州安乗より浦賀迄里数

志州安乗ハ遠州横須賀江三拾八里 安乗・雨矢共(的カ)に同湊なり、此処より

鳥羽江五里、鳥羽ハ的矢共遠州沖通りなり、日和

待之処なり、冬春ハ地風多けれハ鳥羽江入、冬秋

ハ沖風多けれハ安乗へ入ると云へり、扱此間地方

ハ志州鳥羽・伊勢太神宮・同国桑名城・尾州名古屋

屋城・三州(刈谷)苧屋城・同西尾城・遠州浜松城也

横須賀ハ御前崎江拾四里 此辺富士山見ゆる

御前崎ハ色崎江拾八里 此間駿河国にして地方江富士山・三保松原・熊

野山・田子ノ浦抔名所数々有り

此処ともに伊豆の国なり、下田ハ上下大湊なり、

入口遠見番所有り、此辺沖の方に豆州の七島有り

右合而七拾五里の間遠江洋といふ、東海第一の難処なり

下田ハ外浦江三里 内豆州の内にして湊なり

外浦ハ網代江拾七里 内豆州の内也、此沖ニ豆州大島有り、地方ハ七里、

鳥廻りも七里也、麦・琉球芋抔多く産するよし、

民家数千軒も有りといふ

網代ハ御崎江拾八里 此間相模洋といふ、地方ニ小田原・江の島・鎌倉

有り

御崎より浦賀江五里 東海第一の上下大湊、入口の鼻に常燈66り、湊内ニ

番所有り、出入を改む、入湊の時ハ常燈66を取り梶

二見る也、夫ハ少シ下沖の方ニ河(あしかばへカ)しりといふ磯有

り、水上五尺斗出たり、上下ニ并ひて沖の方ハ下

広かり綱二房斗り、船道行出来難しとぞ

校訂

- 1 〈諸〉コノ後「此ヨリ紀行を記す」トアリ 2 〈旅〉加藤 3 〈諸〉「しかく」
 ナシ 4 〈諸〉覚ゆ 5 〈諸〉出し 6 〈諸〉「買求るよし」ナシ 7 〈諸〉「よし」
 ナシ 8 〈諸〉「別て」ナシ 9 〈諸〉此上 10 〈諸〉理屈 11 〈諸〉依之 12 〈諸〉
 ニて 13 〈諸〉「たり」ナシ 14 〈諸〉弥 15 〈諸〉一人 16 〈諸〉常ニ 17 〈諸〉
 あり 18 〈諸〉鳥 19 〈諸〉高底 20 〈諸〉「杯」ナシ 21 〈旅〉またまた 22 〈諸〉
 ポッロード 23 〈諸〉に候へハ 24 〈諸〉重島 25 〈諸〉重 26 〈諸〉暦観 27 〈諸〉
 いふとも 28 〈諸〉当り 29 〈諸〉ならん 30 〈諸〉難なくも 31 〈諸〉九ツ時
 32 〈諸〉絶間もなく 33 〈諸〉扱又 34 〈諸〉出したり 35 〈諸〉進まん 36 〈諸〉
 たりし 37 〈諸〉出し 38 〈諸〉「に」ナシ 39 〈諸〉常木 40 〈諸〉哀を催した
 り 41 〈諸〉「の辺」ナシ 42 〈諸〉由 43 〈諸〉帰り 44 〈諸〉臨ミ 45 〈旅〉

居て 46〔諸〕吹たるのみ 47〔諸〕此処にて停泊したり 48〔諸〕難くして 49〔諸〕
時甚難く 50〔諸〕ありて 51〔諸〕早々舟 52〔諸〕遠ち近ち 53〔諸〕待ちた
り 54〔諸〕ニ 55〔諸〕か 56〔諸〕「その」ナシ 57〔諸〕奉りあり 58〔諸〕
朱舜 59〔諸〕杯ハ 60〔旅〕いま かりし 61〔諸〕沖のへつい地のへつ 62〔諸〕
日高川々湊 63〔諸〕二本 64〔諸〕夜半の 65〔旅〕「時」ナシ 66〔旅〕常焼

二、海中日記

〔表紙〕
「海中日記」

四月三日晴天

朝九時二十分線舟ヨリ出船 △午後五時三十分宿浦着于清風亭

同四日晴天

朝七時関検一番丸 △午後以小舸測量港門

同五日陰天

午後見ユル

岡嶋恒之助	横井左平太
市橋四郎太郎	横井大平
岸猪之助	加藤鍊 ¹ 之助 ^(企)
勝山藤五郎	大藤庫次郎
長谷部協	青山悌次郎 ^(三)

午後清風亭ヨリ一番丸へ移ル、夫ヨリ割当番護一番丸

五日当番

酒井信一郎	伯林之介 ^(助)
横井大平	三岡友蔵 ²
溝口辰五郎	青山悌二郎

同六日雨、五ツ半時頃ヨリ晴、昼後八ツ時ヨリ雨降ル

朝当番、昼後川船ス、其ヨリ滝谷寺参詣ス、面会住持³二翁^(肩カ)面書頼ム、七

ツ過舟へ帰ル

同七日朝雨、四ツ過晴、九ツ半過雨

朝四ツ半時頃 三岡八郎 松原孫七郎 兩人相見ル

同八日晴天

午前御家老・御側御用人・御奉行・御目付・郡奉行、右之重役相見ル、午後右之重役ヨリ酒肴色々持参ニテ催別杯ヲ酒席、朝鉄炮試見有之

同九日晴天、西北風

朝四ツ時過出帆ス、午後舟中亀島沖ニテ(マ)飯求ム、十三里斗リ、夜八ツ時頃ヨリ東南嵐ニテ風出テ暁マテヨリ五ツ半時頃マテ十三四里斗リ

同十日晴天、西北風

一日之内五六里斗、5飯舟ニツク、日暮ヨリイカ釣ルコト百斗リ

十一日晴天、朝嵐

一日之内三四里斗リ、夕八ツ時頃ヨリ北風出ル

同十二日晴

午後東北風少ク来ル、一時行一里半斗リ、見経ヶ崎於左舷之後

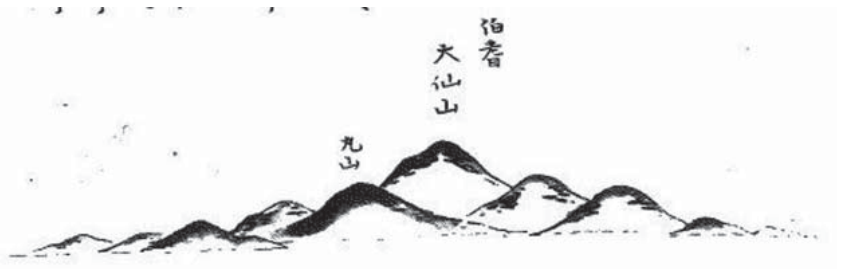
同十三日曇

朝舟行、每一時一里半或二里、午後三時三十分(馬)但島柴山湊ニ入ル、尤風ナク舟ス、マス、ソレユエナリ、但州美含郡、一統上陸入湯、宿入江権兵衛家セマク、三軒ニワカル、其ノ日夜当番斗舟ニ宿ス、人数之内水主舟ニ皆宿ス

同十四日晴

止宿之面々朝五ツ半過帰船、四ツ時湊出帆、風ナク一日ノウチ一里斗リ

同十五日曇、午後晴



風力ビニシテ方位シバシバ変ス、午後八ツ時頃舟在但因之境ニ、日暮ヨリイカ百斗リ、夜中鯖四五本

同十六日晴天

朝西南、夕方北東、伯耆大仙山見ユル、北風ニテ一時コト一里半ヨリ二里余ニイタル、夜第一時十分頃ヨリ西南風ヨウヤクツヨク、一時行コト二里半ヨリ三里或ハ四里ニイタル

同十七日雨天

第七時頃風力ヨワク且荒天之兆アルニヨツテ方向ヲヘンジ、(マ)後方へ(マ)颯走シテ一里斗、午後八ツ時頃雲州三保ノ関ニイタリ碇泊ス、一統上陸入湯、下宿北国屋式兵衛、夜賑々敷

(図)

同十八日曇、午後晴天

夕七ツ半時ゴロ三保関出帆、東南風ヨク一時行コト四里余リ、夜二入り風力次第第二減ス、四ツ時ゴロヨリ風殆無シ

同十九日晴

午後八ツ時頃ヨリ曇ル
第五ツ時過ヨリ風稍来ル、一時行コト一里余リ、西南風、午後八ツ半時ゴロ風位ヨカラス、ヨツテ雲州鷺ノ浦港へ碇泊ス、ソノ時七ツ時過、ソレヨリ大社へ参詣ス、鷺浦ヨリ杵築マテ山越ニテ五十丁ニテ一里半トモウスコト山ケンソ、大社ニイタル頃日暮、ソレユエソノトコロニ宿ス、

夜ニキワシク、翌日四ツ時頃鷺浦ニ帰ル、午後舟ニ移ル、廿日朝ノ内雨、四ツ時過晴、風ナク出帆イタシカタク、大社御本体絵図求ム

其日大社ノ社内ニ下宿ス、左ノ名列

伯林之助 岡部冬八郎 山県克之介^(助) 酒井信一郎

水谷虎作¹¹ 渋谷定次郎 榊原五久吉 溝口辰五郎

大町平吉 吉江文蔵

同廿日朝雨降ル、午後晴

朝四ツ時頃杵築ヨリ十九日大社へ参詣之面々鷺浦へ帰ル、午後船へ移ル、其日大社へ参詣之面々左之通

永見多門 岩城寛之助 井原辰二^(立) 横井左平太

横井大平 勝山藤五郎 三岡友蔵 加藤鍊¹²之介

鈴木頼次郎 大藤庫次郎 青山悌次郎^(二) 小木宗隆^(山本)

右之面々朝五ツ半時鷺浦ヲ出、午後帰ル

同廿一日晴天

朝五時三十分鷺浦港出帆ス、午後二時頃ヨリ北風来ル、一時行コト一里半斗リ、第三時三分比ヨリ一時行コト二里半、第五時頃ヨリ一時行コト

三里、夜第七時比ヨリ南西、第二時比ヨリ風力少衰フ

同廿二日晴天

朝五時十六分比ヨリ船石州浜田沖ニ在リ、東南風、一時行コト一里半二里ニ至ル、夕第五時比長州箕島見ユル、夜第二時比ヨリ南々東風稍強ク、一時行コト三里半或ハ四里ニ至ル

同廿三日晴天

午前第七時四十分比ヨリ風力大ヒニ衰フ、午後第一時ヨリ風力稍強シ、

第二時比長州角崎沖ヲ船走ス、第三時二十分比ヨリ風力強ク、一時行コト二里半ヨリ三里半至ル、第四時比ヨリ曇天、第五時比ヨリ風力強ク、一時行コト四里或ハ^(四欠丸)里半、舟之カタムクコト二十一二度、夜第十一時比ヨリ風猶強ク、筑前近クニ至ルト雖トモ、闇夜且曇天ニテ方位向定メカタク、ユエニ止ムコトヲ得ス、マギリニテ天明ヲ待ツ、第二時比ヨリ風力大ヒニ衰フ

同廿四日曇天

朝第四時比筑前大島之辺ニアリ、此辺小島多クアリ、第五時十五分比沖ノ方ニアタツテ三本柱一烟筒ノ船北東ニ向ツテ^(進力)追走ス、何国ノ船ナルヤフラフ見エス、故ニ相シレス、午後第四時肥前呼子港へ碇泊ス、此辺小山ニ牛馬沢山相見ル、呼子港へ碇泊スルハ此辺島間舟路狭ク^(マヤ)塩ナルニヨツテ、夜中走行スルコト甚難キヲ以テナリ、当番外上陸ス、下宿岡部新左衛門

同廿五日曇天

朝第五時比止宿之面々帰船、長崎表ニ警備有之、入港難致き趣風説有之ニ付、山県・酒井呼子表へ唐津より出張之役輩へ応対之タメ被罷越、午頃帰船、此ノ持分小笠原、唐津より出張役人津田重平、其元ヨリ書付相渡ス、左之通り

一異船只今八九艘残居申候趣、其内巻艘者軍艦之由、余ハ壳船之由
一一切ハ異船十四五艘も参り居申候趣ニ御座候得共、長崎表御手当等
一厳重ニ付テハ、自然恐レ候而、追々引取、八九艘ニ相成居候由
一筑前侯三番手迄御引取ニ相成、残も追々御引取ニ相成申候由
一肥前侯ハ御出張ニ相成不申由、当月廿三日長崎出帆之趣、此舟御役

人桐山市郎太夫殿ヨリ承ル

右二付即刻出帆、午後第三時雨天逆風ニ相成、平戸田助湊へ入ルコト不得止ムコトヲ、港外一里半斗リノ処ニ碇泊ス、夕第五時過キ頃

同廿六日雨天

(田助) 午前第十時出帆、午後第一時平戸タスケ港碇泊ス、一統上陸入湯、下宿繩屋、其内半分手狭ニ付大河屋止宿ス、其日平戸城下見物ス、山城、夕スケヨリ一里斗リ

同廿七日晴天

午前第九時五十分タスケ港出帆、同刻筑前蒸キセン崎陽ニ向フテ進走ス、午後第一時頃ヨリ風力稍強、一時行コト三里或ワ三里半余、夕第六時後ヨリ風力微弱、夜第十時頃長崎港外一里半程之処ニ至トユエトモ風少クシテ入港スルコトアタワス、遂ニソノ処ニ碇泊ス

同廿八日晴

朝第五時頃揚碇、風港口ヨリ吹出シ、容易ニ入ルコトヲ不得、第十一時頃入港ス、大谷・加藤(徳太郎)・藤左衛門(藤左衛門)出向ス、ソレヨリ福井屋へ一統上ル

同廿九日晴

五月朔日

午後第三時御船請取渡首尾克相済ム

但シ彼水夫共過半残り居ル、今夜風雨強シ

同二日

朝之内異人共悉引取、石炭積込ム

同三日

午後第一時頃亜ノアルムストロン、御船之旧主、出船イタスニ付暇乞ト

シテ来ル、同刻薩州家中五代才助(友厚)来ル、三時三十分左之面々御船為見物来ル、

会津ハシ(マ)・松本良順、右酒肴ヲ以テ饗応ス、六時三十分帰去ス

同四日

午前一統乗船、当番立直ス、其時運用機関番割相定ム

同五日

第六時蒸氣焚始ム、午前七時三十分小曾根父子乗船ス、第七時五十分頃機関少々故障有之二付蒸氣焚止ム、依機関故障有之二付、亜人四人来リ直ス

同六日晴

第三時三十分ヨリ蒸氣焚方準備ス、第七時頃上碇、長崎港出帆、一時行コト四里、九時十五分頃松島ヲ經過ス、十時頃ヨリ北風稍強シ、午後二時頃平戸ヲ通過ス、第六時呼子港ニ碇泊ス、七時二十分唐津ヨリ呼子へ出張津田重平使来ル、小笠原家来、七時五十分ストツクル共入湯ス、今晚ヨリコロツク打方時数ヲ打ツ

同七日雨

四時十分蒸氣焚付、一時行コト七里或ハ八里、第六時三十分呼子港出船ス、東北風強、九時三十分頃玄界洋ヲ過ル、午後一時二十分頃ヨリ東南風強シ、第四時八分時長州フクラ港ニ碇泊ス、一統上陸、壺番丸定宿ニ入湯ス、風雨強シ

同八日雨

五時二十分蒸氣焚付出ス、第六時五十分揚碇ス、北東風、一時行コト八里余、第十時角島ヲ過テ風力強盛ナラストユエトモ甚順ナリ、十時三十

分帆ヲ用ユ、舟行ハナハタ疾シ、一時行コト十三里ヨリ十三里(半欠カ)イタル、
十時十五分雨霽

同九日曇天

ケイトル掃除

(改丁)

文久三亥之初夏四月五日ヨリ一番丸当番割

伯林之助	山県克之助
酒井信一郎	岩城寛之助
横井大平	渋谷定次郎
三岡友蔵	石川定之助
溝口辰五郎	加藤鍊之助 <small>(介)</small>
高山悌二郎 <small>(善)</small>	久保村純助
岡部冬八郎	永見多門
水谷虎作	横井左平太
井原立二	岩村六蔵
榊原五久吉	鈴木頼次郎
河合常之進	大藤庫次郎
大町平吉	吉口文蔵 <small>(延)</small>

右朝昼夜繰番

(改丁)

文久三亥年

四月上旬

水谷

(書写奥書)
右海中日記 壹冊

越前福井市水谷勝展所蔵 原本薄葉 小本九枚 大正八年二月採訪今九年四月謄写了

校訂

1〈若〉練之助 2〈越〉岡部 3〈越〉住寺 4〈若〉風止テ 5〈若〉鯁 6〈若〉但国 7〈越〉北 8〈若〉式兵衛 9〈越〉トコロ 10〈越〉岩部 11〈若〉勝作 12〈若〉練之介 13〈越〉碓白 14〈越〉忘 15〈越〉付二者 16〈若〉黙シ 17〈若〉「コトヲ」ナシ 18〈若〉追走 19〈越〉物碓 20〈越〉次出シ 21〈若〉五十分 22〈若〉乗り 23〈越〉隼備 24〈若〉「呼子港出船又東北風強九時三十分」ナシ 25〈越〉角小島 26〈若〉「文久三亥之初夏四月五日ヨリ一番丸当番割」以下ナシ